

## 生徒の頭髪と生徒指導に関する一考察

白石 淳 北海道女子大学短期大学部

### 抄 録

今日、中学生、高校生が頭髪を茶色に染める、ピアスをつけることの是非が問われている。学校でこれらのことは、校則により禁止されているところが多い。しかしながら、頭髪の問題は学校生活ばかりではなく家庭生活上のことも考慮されなければならない。頭髪の問題については、憲法にもかかわる問題でもあり基本的人権から考えると子どもとその親の意思が尊重されなければならない、基本的には自己決定権にゆだねられるべき問題であると結論づけた。さらに、これらの問題については、憲法とのかかわりがあるとの認識が低く、意識の改革が必要であると指摘した。

キーワード：生徒指導、子どもの人権、校則、生徒の頭髪

### I はじめに

平成8年10月3日付けの北海道新聞に「校内、茶髪、ピアス容認」「力の指導180度転換、校長決断、外見で判断しない」という見出しの記事が掲載された。今日多くの学校の校則は、服装、髪長さ・型・色、持ち物などについて細かく規定し規制している。校則に関する裁判もバイク退学事件（東京高裁：平成4年3月19日判決）、パーマ退学事件（東京高裁：平成4年10月30日判決）などがみられ、学校と生徒・保護者との意見の対立がしばしば裁判となって争われている。さらに頭髪については、公立中学校で丸刈り等に関する定めをおく行為の処分性につき初めて判断した最高裁判所の判決が第1小法廷であり、行為は抗告訴訟の対象となる処分にはあたらないとして上告が棄却された（平成8年2月22日判決）。このように校則の頭髪規定についても人権侵害にあたるとして、しばしば法廷に持ち込まれており<sup>1)</sup>、今日では頭髪の自由などが子ども自身や学校内はもちろん世論の関心の強い問題のひとつになっている。

校則については「校則は、児童生徒が健全な学校生活を営み、より良く成長発達していくため、各学校の責任と判断の下にそれぞれ定められている一定の決まりである。校則自体は教育的に意義のあるものであるが、その内容及び運用は、児童生徒の実態、保護者の考え方、地域の実状、時代の進展等を踏まえたものとなるよう積極的に見直しを行うことが必要である<sup>2)</sup>」と地域社会、時代に適した合理性のある内容でなければならないとされているが、それ以前に頭髪は身体の一部であり子どもの学校生活のみならず家庭生活を含む生活全体にも影響をおよぼすもので個人の自由とのかかわりが大きい重要な

人権問題であると考えられる。

したがって、今日では頭髪についても生徒及び親の自主性にゆだねる学校は少なく多くの学校が毛染め・脱色・パーマやドライヤーによる巻毛を禁止しているのはもちろん眉・脱色・長さなどの規制をしているが、これらについては他の規則とは異なり子どもと親の意思が最大限尊重されなければならない問題<sup>3)</sup>であるとする。

ここでは学校内の生活だけではなく日常の生活にもかかわる頭髪問題を中心とした校則について、校則の考え方、社会の実状を踏まえながら考察していく。

### II 校則と人権

#### (1) 校則の性格

校則の法的性格としては、校則を公法上の特別権力関係と位置づけてとらえること（学力テスト事件：昭和51年5月21日最高裁判決）もあるが、これは今日ではほとんど用いられてはおらず、校則を在学契約説としてとらえていくのが学会の多数説となっている。在学契約説では、学校・教師と子どもの関係は憲法で保障されている子どもの成長発達と学習権を保障すべき法的な関係で、生徒や親は学校・教師に従属するものではなく対等な権利義務関係に立つ。したがって、校則はその学校・教師と子ども・親との契約内容を示すものとなり<sup>4)</sup>、校則の内容については両契約当事者の合意が不可欠であるということになる<sup>5)</sup>。

教育が非権力作用であることは学説上の公知の事実であり、子どもは教育の受動的客体ではなく能動的な教育の主体者であると明らかにされ、また判示されており<sup>6)</sup>、校則の問題点としては校則の内容及びその制定の方法、

とくに内容についてはさまざまな問題が内在しており、なかでも学校生活上必要な規則だけではなく私的領域にまで学校が規則をしていることが問題としてとりあげられることが多いと指摘されている<sup>7)</sup>。

教育現場における慣用語としての校則は児童生徒の管理にかかわる規則のことであり<sup>8)</sup>、生徒規則と生徒心得とは本質的には異なる。服装や髪型、持ち物、学校内外での生活態度や男女交際などに関するものは、本来生徒の心構え心得的な要素が強い事項である<sup>9)</sup>。しかし、校則には重要な教育的機能があるので、その教育的機能を十分に発揮させる方向で校則の内容や運用を考えていくことが必要である。それは第一に、児童生徒が自校の現実の学校生活に照らし十分に考え話し合うことを通してその意義を理解し、規範意識を育成させること。第二に、既存の校則の中に、いきすぎのもの、現在の状況にそぐわないもの、形式化・形骸化しているもの、不要なものをどうすればよいのかを十分かつ慎重に検討させること。第三に、できあがった新たな校則を教師が強制して児童生徒を管理するというのではなく、児童生徒が自己管理・統制や相互管理・統制できるように、校則の実践化を促すことが重要であるとされている<sup>10)</sup>。このように校則を制定運用すること、規則によって外から生徒を管理することは管理主義や厳罰主義に陥りやすく、ひいては人権侵害につながる危険性を有していることに留意しなければならない<sup>11)</sup>。

昭和63年文部省が「厳しすぎる校則の見直し」を指示した。そして、「それぞれの学校では、一定のきまりを設けて指導しているが、学校生活のなかで、児童、生徒自らを律する心や基本的な生活習慣等を身につけることは大切であり、校則は各学校の教育方針に基づき、児童、生徒の健全育成を願って設けられたものであるが、校則の設定・運用にあたっては、地域の実情や保護者の考え方、児童、生徒の実態等を十分把握して適切になされるよう指導に努めている。校則の遵守を強調するあまり、指導に行き過ぎもみられる。校則の見直しは、服装や頭髪の規定にかかわるものが中心となっている。児童生徒の健全育成という立場に立って、各学校における校則の見直しや適切な運用が図られるよう努めていく」と平成2年度第3回定例北海道議会における教育長答弁のとおり、校則を用いた教育としての適切な指導が求められているといえる。また、子どもの権利条約第28条第2項には「学校の規律が児童の人間の尊厳に適合する方法及びこの条約に従って運用されることを確保する」と示されているように児童の人間としての尊厳と人権を重視して校則が制定されることが求められている。

## (2) 校則の制定

校則の内容は、親の教育権・子どもの権利との関係で、憲法第13条、第18条、第19条、第20条、第21条、子どもの権利条約上の諸権利やリヤドガイドラインのⅣのB・教育の項などの基本的人権の制約に関連するので、権利を制約される者の承認・承諾が必要となる。また、子どもの教育の第一次的責務は親（保護者）にあるので親の教育権の視点からも、生徒指導に関する校則制定には親の参加がさらには子どもの参加が保障されなければならない<sup>12)</sup>。人権の制約に関する一般原則から考えると次の点が重要である。第一に、学校の設置目的と無関係な事項については、学校が有している校則制定権の限界を超えているため、仮に多数の者の意見であったとしても校則で制約することは許されないこと。第二に、生徒個人の自己決定権に最終的にゆだねられるべき事項は、仮に多数の合意があっても人権保障の見地から制限することはできないこと<sup>13)</sup>。しかし、校則のなかには子どもの思想・良心の自由や表現の自由を著しく制限したり、剝奪しているものが少なくない。規則は、あくまでも「生徒心得」として掲げ、子どもを信頼し子どもの主体的な判断に任せるという方向が望まれることになる。「茶髪、パーマもピアスもいいではないか。自由を与え突き放して初めて子どもはそれらのことや決まりについて考えるのではないか」との意見もあり<sup>14)</sup>、すべてを規制する考え方に教育上否定的な考え方もみられる。

学校も生徒指導のありかたを一部転換し、「茶髪・ピアス」などという身なりの問題と「暴力・喫煙」などとははっきり区別した指導方針を打ち立てたところもある。法に触れたり、他人の人権を侵害する行為を絶対許さない姿勢でのぞみ、その他は話し合いによって指導を進める。これに対しては生徒の反応は好意的であるという結果も得られている<sup>15)</sup>。

## Ⅲ 髪型に関わる判例・人権救済事件

### (1) 判例からの考察

頭髪が裁判で争われたのが熊本地裁の丸刈り事件（熊本地裁：昭和60年11月13日判決）で、熊本県内の中学校の生徒とその親が、校則で頭髪を丸刈り強制することは憲法に違反するとして訴えた事件である。「他の中学校との比較で頭髪規定は憲法第14条の法の下に平等に、法律によらないで身体の一部である頭髪を切除するのは憲法第31条の正当な手続きの保障に反する。また、髪型は個人の美的感覚、すなわち表現に関する事項であるので憲法第21条の表現の自由に反する」というのが訴えの主旨であった。判決では「校則は各中学校で制定するものであるから合理的差別である。強制的に切除するもので

はない。髪型が思想等の表現であることは特殊な場合を除き認めることはできず、まして中学生の髪型が思想等の表現であるとみられることは希有であり憲法に反しない」、「本件校則はその教育上の効果については多分に疑問の余地があるというべきであるが、著しく不合理であることが明らかであると断ずることはできないから校長が本件校則を制定・公布したこと自体違法とはいえない」と教育的問題は残したものの原告の請求を棄却した。校則が著しく不合理だとは断言できないが、同時に丸刈り校則を正当化する学校側の言い分もすべて肯定したことではない。

また、市立中学校の「中学校生徒心得」に男子生徒の髪型は丸刈りとする旨の定めをおくことの是非が争われた事件として、大阪高裁は平成6年11月29日に第一審神戸地裁（平成6年4月27日判決）の判決理由を引用した上で、「本件のこれらの定めは、生徒の守るべき一般的な心得を示すにとどまり、それ以上に個々の生徒に対する具体的な権利義務を形成するなどの法的効果を生ずるものではないとした原審の判断は、首肯するに足りる」とし、このような校則は心得的なものであることをあらためて認めた。

同様に男子生徒に丸刈りを強制する校則が争われたものとして、1958年に水戸地方法務局が長髪を禁止した茨城県立高校の校則に関して茨城県教育委員会に対し是正を勧告したものがあつた。1974年には、日本弁護士連合会が丸刈りを強制した埼玉県大井中学校に対し是正勧告、同中学校は勧告を直ちに受け入れ校則を改正した。

今日、校則によってパーマ、毛染め、脱色を禁止している学校が多い。このような校則に合理性を認めるか否かはそれぞれの価値観によって異なるが、一般にパーマ、毛染め、脱色などを不適切な髪型として禁止する校則を支持する声が多い。しかしその一方的な強制がすべてに許されないことは、熊本地裁判決の主旨からも明らかである<sup>16)</sup>。

## (2) 人権救済事件からの考察

各弁護士会の子どもの人権救済では、髪型については次のような事件がみられる<sup>17)</sup>。

益子町立中学校丸刈り強制事件（平成3年10月3日～平成4年2月24日）。栃木弁護士会が「生徒の基本的な人権を侵害し、教育基本法の定める教育目的にも反すると言わざるを得ないので、直ちに廃止されるよう」学校に勧告。

布佐高校頭髪カット事件（昭和62年5月～昭和63年1月20日）。千葉弁護士会が「頭髪カットは個々の教師の判断で行われたものではなく、学校の方針として行われたものである」ことが判明したので、教師個人にではな

く学校に警告、千葉県教育委員会に要望。

岡崎葵中丸刈り強制事件（昭和62年7月25日～昭和63年10月21日）。名古屋弁護士会が「男子生徒に一律に長髪規制をすることは、教育指導上の合理的理由並びに必要性が認められず、長髪を希望する生徒の基本的な人権を侵害するもの」と中学校長に勧告、岡崎市教育委員会に要望。

可児頭髪規制事件（平成4年5月～同年10月）。岐阜弁護士会が「頭髪規制を直ちに廃止すること」中部中学校に勧告、「髪型規制を廃止し、生徒の人権を侵害しないよう指導すること」を可児市教育委員会に要望。

神戸市立大原中学校丸刈り規制事件（平成2年11月）。神戸弁護士会が「丸刈り規制は、明らかに人権を侵害するものであつて、直ちに廃止されるべきものである。さらに、父母、教師は、生徒自身の参加も確保しながら、生徒の人権を守り、生徒の自主性を育てる観点から、校則全般の見直しのために議論を開始すべきである」と神戸市立大原中学校に勧告。

神戸市立大原中学校頭髪規定事件（平成2年11月7日）。神戸弁護士会が「丸刈り規制は、髪型の保有を望む男子生徒に対する基本的な人権を侵害するものであり親の教育権をないがしろにするもの」と中学校長に勧告。

丸刈り校則見直し人権勧告事件（平成5年2月5日）。福岡弁護士会が「丸刈りは憲法13条に基づく生徒の自己決定権ないし人格権などの基本的な人権を侵害するものであり、合理的理由も認められないから、速やかに撤廃されるべきである」と丸刈り校則を持つ県内の全中学校、上記中学校の管轄教育委員会に意見、要望。

昭和61年1月～平成7年3月まで日本弁護士連合会、各弁護士会が扱った子どもの人権救済事件80件中、校則に関する事件は11件でこれは体罰に関する事件に次いで多い人権救済事件となっている。

制服問題についても、千葉県弁護士会が制服などにかかわる人権申し立てについて、「服装は個人の自由であり服装選択権の自由は憲法第21条、第13条の保障するところである」と結論づけている。これらの人権救済事件は、いずれも自己決定権や基本的な人権の観点にたち検討し子どもの人権を犯していると判断、人権擁護の立場から勧告などがなされた。各々の子どもに対する人権意識の違いがこのような事件、状況をつくりだしているのではないかと考えられる。

## (3) 髪型と人権

「頭髪は身体の一部であり、髪型の自由は、表現の自由、人身の自由として、憲法第21条、第13条の保障するところである」と日弁連勧告書<sup>18)</sup>に述べられているように、髪型をどうするかは憲法13条の幸福追求権から導かれる

プライバシーの権利・自己決定権の問題であり、憲法21条の表現の自由とも関連してくる自由権にかかわる重要な問題である。公立学校は子どもの自由意思で好みの学校を選ぶことは事実上不可能なので、そのような状況の中で一定の髪型を学校側の意思で押しつけることは、憲法で保障されている権利、自由を侵害することになると考えられる。とくに髪型は家に帰っても自由な形に変えられないという点でも問題となる。したがって、極端に他人に対して迷惑が及ばない限り髪型は子どもと親の好み優先されるべきである<sup>19)</sup>。

外見の乱れは心の乱れということもいわれるが、このことについては時代錯誤も甚だしいと指摘されている<sup>20)</sup>。制服着用の場合「髪はサーファークット、プレスレット、エリを立てる、ソデを折る、カラーソックス、スカートは長め」というのが服装からみた不良化のきざしという指摘もみられるが<sup>21)</sup>、その概念的な外見も地域社会、時代により変化するもので一概に結論づけられるものではないと思われる。

子どもの権利条約においても、表現の自由、プライバシーの保護や名誉は一人の人格主体者としての権利から導きだされるもので、頭髪の権利においてもそれらは守らなければならないものである。

#### Ⅳ 髪型に関する意識

##### (1) 意識

若い人の意識は社会、時代ともに変化しているといわれ<sup>22)</sup>、この変化は速いテンポで進んでいると考えられる。学校生活の規則についてみると、頭髪の「丸刈り・おかっぱ」については「不支持」の割合が82.5%で、理由は「嫌だ、きらい」の割合が70.2%である。一番嫌な校則では、髪型が1～3年生を通じて最も多く不支持の割合が高い<sup>23)</sup>。また、最近問題になっている「耳にピアスをつける」では男子生徒で31.5%、女子生徒で26.9%の者が「よくない・どちらかというときよくない」と考えているが、これは「よくない・どちらかというときよくない」のなかでは、「授業中ジュースを飲む」の80.2% (男子)、83.8% (女子)、「無断で早退する」の84.3% (男子)、61.6% (女子)、「許可なしにアルバイトする」の35.6% (男子)、38.3% (女子) よりも低い割合であり、生徒は「耳にピアスをつける」ことについては、それほどいけないこととは思っておらず容認されているものとみることができる。一方、教師全体では「耳にピアスをつける」が77.7%、「授業中ジュースを飲む」が95.4%、「無断で早退する」が96.7%、「許可なしにアルバイトする」が77.9%と「よくない・どちらかというときよくない」と考えており、「耳にピアスをつける」ことも他のルールと同様によくない

こととみている。ただし、ピアスをつけることに関しては教師においても39歳以下の教師では、その割合は69.6%と若干否定の割合が減る<sup>24)</sup>。実際にピアスをしている高校生は校則で83.5%が禁止されているが、13.5%の者がピアスをしている。ピアスをするについては、58.5%の者が「どうでもいい」、31.4%の者が「カッコいい」、10.1%の者が「カッコわるい」と感じている<sup>25)</sup>。

このように教師、生徒と保護者の間、さらには年齢によりこれらのことに対する問題意識には違いがみられる。茶髪、ピアスなどには大人の偏見によるもの、若者の間では普通のこと<sup>26)</sup>、気にならなければ気にならない<sup>27)</sup>という見方もあり、意識の違いの差には大きいものがある考えられる。

##### (2) 教員養成系短大学生の意識

調査は教員養成を主とする初等教育学科と保健体育科養護教諭コースの短期大学学生に対して頭髪、ピアスについて行った<sup>28)</sup>。全体でみると、表-1のように「中学生が学校の中でピアスをつけること」以外は「賛成・仕方がない・親が認めるなら賛成」という肯定の者が50%を越えている。とくに「高校生が家の中でピアスをつけること」については、38.6%の者が積極的に賛成であり、90.2%の者が肯定している。同じ内容の各項目に対して、高校生は中学生よりも肯定の者の割合がいずれも高く、その対象年齢に関係があるものと考えられる。「親が認めるのなら賛成」の割合は「中学生が家の中でピアスをつけること」「中学生が学校の中でピアスをつけること」「中学生が頭髪にパーマをあてること」で高い。また、ピアスについては、「家の中」の方が「学校の中」よりも中学生、高校生ともに肯定的に認められ、校則での規制が意識のなかに働いているのではないかと考えられる。また、法的には認められている「高校生がバイクを運転する」と比較すると「高校生が家の中でピアスをつける」「男子高校生が髪を伸ばす」以外では高校生に対しては「高校生がバイクを運転すること」ことよりも容認されている。

これらのことは、「人を外見で判断しない」という考え方にも関係すると考える。表-2をみると、74.9%の者が「人を外見で判断しない」ことに対して肯定的に考えており、このような意識から頭髪問題などをとらえているのではないと思われる。しかし、人権意識から髪型などの問題をとらえることについては「髪型の問題などは憲法に関係があると思わない」と69.8%の者が思っており人権への意識・関心が低いと思われる。

親は服装から髪型まで、すべての責任を学校に肩代わりさせているという指摘もあるが<sup>29)</sup>、「親が認めるなら賛成」とあるように頭髪などは学校生活よりも家庭生活



表一 茶髪にする、ピアスをつけることについて

%(人)

	賛 成	仕方がない	親が認める なら賛成	反 対	わからない	N. A.	合 計
中学生が家の中でピアスをつけること	20.0(18) 20.0(25)	7.8( 7) 9.6(12)	44.4(40) 40.0(50)	18.9(17) 24.0(30)	10.0( 8) 5.6( 7)	0.0( 0) 0.8( 1)	100.0( 90) 100.0(125)
中学生が学校の中でピアスをつけること	11.1(10) 9.6(12)	7.8( 7) 6.4( 8)	16.7(15) 10.4(13)	48.9(44) 61.6(77)	14.4(13) 11.2(14)	0.0( 0) 0.8( 1)	100.0( 90) 100.0(125)
中学生が頭髪を茶髪にすること	14.4(13) 11.2(14)	27.8(25) 24.0(30)	20.0(18) 25.6(32)	26.7(24) 38.4(48)	11.1(10) 6.4( 8)	0.0( 0) 2.4( 3)	100.0( 90) 100.0(125)
中学生が頭髪にパーマをあてること	15.6(14) 16.0(20)	22.2(20) 16.0(20)	24.4(22) 20.8(26)	25.6(23) 36.8(46)	12.2(11) 9.6(12)	0.0( 0) 0.8( 1)	100.0( 90) 100.0(125)
男子中学生が頭髪を伸ばすこと	22.2(20) 20.0(25)	30.0(27) 23.2(29)	10.0( 9) 6.4( 8)	28.9(26) 40.8(51)	8.9( 8) 8.8(11)	0.0( 0) 0.8( 1)	100.0( 90) 100.0(125)
高校生が家の中でピアスをつけること	36.7(33) 40.0(50)	22.2(20) 23.2(29)	32.2(29) 26.4(33)	3.3( 3) 7.4( 9)	5.6( 5) 1.6( 2)	0.0( 0) 1.6( 2)	100.0( 90) 100.0(125)
高校生が学校の中でピアスをつけること	22.2(20) 22.4(28)	28.9(26) 22.4(28)	11.1(10) 18.4(23)	23.3(21) 30.4(38)	14.4(13) 4.8( 6)	0.0( 0) 1.6( 2)	100.0( 90) 100.0(125)
高校生が頭髪を茶髪にすること	25.6(23) 27.2(34)	35.6(32) 24.8(31)	14.4(13) 21.6(27)	8.9( 8) 17.6(22)	14.4(13) 7.2( 9)	0.0( 0) 1.6( 2)	100.0( 90) 100.0(125)
高校生が頭髪にパーマをあてること	30.0(27) 36.0(45)	30.0(27) 26.4(33)	20.0(18) 16.8(21)	7.8( 7) 12.8(16)	12.2(11) 6.4( 8)	0.0( 0) 1.6( 2)	100.0( 90) 100.0(125)
男子高校生が頭髪を伸ばすこと	28.9(26) 24.8(31)	34.4(31) 30.4(38)	5.6( 5) 4.0( 5)	21.1(19) 32.8(41)	10.0( 9) 6.4( 8)	0.0( 0) 1.6( 2)	100.0( 90) 100.0(125)
高校生がバイクを運転すること	27.8(25) 32.8(41)	15.6(14) 15.2(19)	33.3(30) 23.2(29)	17.8(16) 21.6(27)	5.6( 5) 5.6( 7)	0.0(90) 1.6( 2)	100.0( 90) 100.0(125)

表二 外見で判断しない、憲法に関係あるかについて

%(人)

	賛 成	反 対	わからない	そ の 他	N. A.	合 計
「人を外見で判断しない」ということについて	76.7(69) 73.6(92)	2.2( 2) 4.0( 5)	14.4(13) 13.6(17)	6.6( 6) 8.0(10)	0.0( 0) 0.8( 1)	100.0( 90) 100.0(125)
	あると思う	ないと思う	わからない	N. A.	合 計	
髪型の問題などは「憲法」に関係があると思うか	12.2(11) 10.4(13)	65.6(59) 72.8(91)	22.2(20) 16.0(20)	0.0( 0) 0.8( 1)	100.0( 90) 100.0(125)	

において重視されるべきもので、親の責務が重視されなければならない。

## V ま と め

学校教育は集団教育を一つの特質としているので、集団の秩序を維持するためには一定の規律が必要であることは否定できない。しかし、その内容はあくまでも教育目的に照らして必要でかつ合理性をもつものでなければならない<sup>30)</sup>。

校則については、校則を「必要とする」という中学3年生は60.3%とその割合は多いが、「必要ない」という者も39.1%みられる。一方、保護者に対する調査では「ない方がいい」という者は2.7%と校則に対しての否定的な意識の割合は低い。しかしながら、保護者が「校則を

読んだことがあるか」については49.1%が「ない」としている。実際に校則を決めるときにさまざまな意見をどう反映させていくかでは、「先生と生徒会とPTA」で31.4%、「先生と生徒会」で28.2%、「生徒会」で26.2%の順で、可能な限り生徒の意見が反映されるような配慮が求められている<sup>31)</sup>。また、子どもの権利条約第12条に「締結国は、自己の意見を形成する能力のある児童がその児童に影響をおよぼすすべての事項について自由に自己の意見を表明する権利を確保する」とあり、規則の制定についても意見を表明する権利が存在しその実行が国際的にも求められている。

個人の尊厳のなかに、自分のことについて他人の干渉を受けないで自分で決定する自己決定権がある。医療においてもインフォームド・コンセントが尊重され、それに基づいて生命まで決定できるように、自己に関する事項

については十分な説明を受け決定できる権利があるとされているところである。

校則の内容自体に問題はなくても、その運用において著しく子どものプライバシーを侵害する危険性があることにも十分留意しなければならない。校則の内容や運用については、現実的にもまた判例においても、大幅に学校の裁量権が認められている。しかし、それは学校や教師がそれに対して大きな教育の責務を有していることを意味するものであり、校則の制定やその運用にあたっては、子どもの人権の尊重と教育的配慮の下に十分慎重でなければならず<sup>32)</sup>、子どもの人権が学校教育のなかでその中心におかれていなければならない。そして、子どもの権利条約第28条2で「締約国は、学校の規律が児童の人間の尊厳に適合する方法で及びこの条約に従って運用されることを確保するためのすべての適切な措置をとる」と規定されているとおり、学校での規律が児童の人間としての尊厳と人権の保障を念頭においたものにならなければならない<sup>33)</sup>。

頭髪などについては学校は団体生活で過ごすので、他人の極端な髪型により迷惑がかかったりする場合もあるので、自分の髪型も他人の髪型と無関係とも考えられない面もあるので、あまりにも刺激的・反風俗的な髪型が規制の対象になることは一概に否定することはできない<sup>34)</sup>。しかし、これらについては主観的な判断にもとづくことが多く、子ども、大人や教師、年齢により問題意識の差がみられる。子どもと教員養成系短大学生はこれらのことについては容認する傾向がより強いが、これらの肯定的な見方も世の中の流れ、ファッションの流行などの感覚からであり、人権意識からとらえたものではない。

頭髪も人体の一部であるということは刑法上も明らかであり、身体・容姿に関することは本人と親の判断が優先すべきであり、家庭で責任を持つものであると考える。「子どもの権利条約を知っているか」については、保護者は「あることは知っているが、くわしいことは知らない」が最も多く56.2%、次いで「あることを知らなかった」の36.3%、「よく知っている」は5.4%である<sup>35)</sup>。このように、子どもの権利についても内容を周知している者の割合が低く、校則についても父母が読んだことがない者の割合も少なくはない。したがって、教育を受ける権利の主体者である子どもの人権意識の尊重、その根拠の認知が求められているといえる。

## 注・引用文献

- 1) 奥田眞丈・水越敏行編「人間尊重の教育」ぎょうせい 1994 p.156
- 2) 文部省編「平成7年度我が国の文教施策」大蔵省印刷局 1996 p.p.212~213
- 3) 藤田昌士編「日本の教育課題4 生徒の指導と懲戒・体罰」東京法令出版 1996 p.p.19~20
- 4) 兼子仁「教育法」有斐閣 1982 p.405
- 5) 日本弁護士連合会編「子どもの権利マニュアル」こうち書房 1995 p.111
- 6) 坂本秀夫「校則裁判」三一書房 1993 p.72
- 7) 日本弁護士連合会編 前掲書 p.108
- 8) 奥田眞丈・水越敏行編 前掲書 p.151
- 9) 同上書 p.152
- 10) 同上書 p.154
- 11) 同上書 p.152
- 12) 日本弁護士連合会編 前掲書 p.112
- 13) 同上書 p.114
- 14) 津武欣也「個性とは、自由とは」青少年問題第43巻11号 青少年問題研究会 1996.11 p.21
- 15) 東京新聞 1996.11.22
- 16) 日本弁護士連合会編 前掲書 p.p.122~123
- 17) 日本弁護士連合会編「日弁連・弁護士会人権救済申立事例集」明石書店 1995 p.p.264~267, 日本弁護士連合会編「子どもの権利マニュアル」こうち書房 1995 p.p.456~479
- 18) 昭和49年1月19日勸告
- 19) 石井恵美子・影山秀人・串田誠一「子ども法律カウンセリング」有斐閣 1991 p.p.6~7
- 20) 津武欣也 前掲書 p.25
- 21) 麦島文夫・坪内順子「非行少女の心理」有斐閣 1982 p.102
- 22) 津武欣也 前掲書 p.25
- 23) 朝日新聞大分支局「丸刈り・おかっぱにみる中学生の心 髪型アンケート調査」1993.5, 114名調査。
- 24) 長野県高等学校教職員組合教育文化会議青少年文化研究会「学校生活のルールに関する意識と高校生・教職員の文化状況についてのアンケート」1995.9, 県立高校生男子403名, 女子560名, 教師157名調査。
- 25) リクルート学び事業部「高校生総研REPORT」1996.1, 全国の高校生270名調査。
- 26) 津武欣也 前掲書 p.24
- 27) 東京新聞1996.11.24
- 28) 1996.2 調査, 北海道女子短期大学初等教育学科1年目学生90名(有効回答数), 保健体育科養護教諭コース1年目学生125名(有効回答数)。

- 29) 津武欣也 前掲書 p.22
- 30) 藤田昌士編 前掲書 p.19
- 31) 日本PTA全国協議会「学校生活アンケート調査平成8年度」1996.6, 中学生1,926名, 保護者1,842名調査。
- 32) 奥田眞丈・水越敏行編 前掲書 p.157
- 33) 下村哲夫編「児童の権利条約」時事通信社 1994 p.178
- 34) 坂本秀夫 前掲書 p.150
- 35) 日本PTA全国協議会「学校生活アンケート調査平成8年度」1996.6, 中学生1,926名, 保護者1,842名調査。

#### 参考文献

- 菱村幸彦編著「教育の眼・法律の眼」教育開発研究所 1992
- 石川恵美子・影山秀人・串田誠一「子ども法律カウンセリング」有斐閣 1991
- 津田玄児「子どもの人権新時代」日本評論社 1993
- 白石淳「教育を受ける権利における退学処分に関する研究」北海道学校教育研究会研究紀要第8号 1994.5
- 日本弁護士連合会編著「子どもの権利条約と過程・福祉・教育少年法」こうち書房 1993
- 花山尚人「ピアスと中学・高校生」生活指導 No507 明治図書

## A Study on Student's Hair Style and Life Guidance at School

Jun Shiraishi, M.A., Hokkaido Women's College

#### Abstract

Is it good or wrong for student to dye hair brown and pierced ear earring? Many school disapprove of her conduct by school regulations.

However, we consider home life as well as school life to hair style. The student's and parent's opinions are prior to school regulations. Because those are fundamental human rights of the constitution. So it should be decide by ourselves. We have little understanding that the problems are connected with the constitution, so we are necessary to change the consciousness of it.

Key words : life guidance, rights of child, school regulations, hair style